家庭礼拝のために

2024年12月22日

わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。

ルカによる福音書２章４６、４７節

黙　　祷	
讃 美 歌	１７５
主の祈り	９３－５A（讃美歌21 P.146）
讃 美 歌	２４９
聖　　書	ルカによる福音書１章２６節～５６節(新約聖書P.８５)
祈　　祷	
使徒信条	９３－４A　（讃美歌21 P.148 ）
讃 美 歌	２５９
奨　　励	「マリヤの賛美」
讃 美 歌	２６１
頌　　栄	２４

＊＊

奨励〔要約〕

マリヤがヨセフと婚約したのは十代半ば頃と言われます。マリヤが新しい生活のために学ぶ日々を過ごしていた時、御使がマリヤにあらわれました。マリヤの反応は祭司ザカリヤの様子とは対照的です。御使を見て驚いた様子はがなく、「恵まれた女よ、おめでとう。主があなたと共におられます」の言葉を聞いて、心が乱れてしまいました。それでも、御使の言葉の意味を思い巡らせたのです。ユダヤの子供は、幼い頃から会堂で礼拝を守り、律法やユダヤの歴史を学び、律法に従う生活を教えられます。マリヤも、日々の生活で、御言葉によって過ちに気づかされたり、罪を自覚することもあったでしょう。マリヤは、御言葉によって自分がどんな者であるかを教えられ、謙遜を身につけていました。また御言葉は、荒れた心を潤したり、神様のあわれみに包まれる経験を重ね、御言葉に命があることを経験していたのです。だから、御使の言葉に意味を思いめぐらせたのです。御使はマリヤの心を動きを知り、預言の言葉（イザヤ7:14、エゼキエル37:24, 25）の通り、神様の御旨が成就することを告げました。マリヤは御言葉を受け取っても、ヨセフの思い、人々の誤解、誹謗中傷、石打ちの刑…と、次々と浮かんだでしょう。御使から、聖霊による受胎であること、エリサベツの懐妊を教えられ、神様の御旨の確実さを知らされました。マリヤは「主のはしため」として、生きるも死ぬも主の奴隷であると自覚したのです。エリサベツの身に起こったことも神様によることを確信し、自分の身に起こったことを誰にも告げず、ナザレからユダの山地まで大急ぎで出かけたのです。エリサベツは聖霊に満たされて、マリヤを「主のお語りになったことが必ず成就すると信じた女」と、真実な信仰であると言い表しました。マリヤは、心に蓄えられた御言葉の全てが、一つにつながったのです。神様の救いは、神様のあわれみによると感じとりました。エデンの園から追放、祝福の基となるアブラハム、ダビデの若枝が実を結ぶ約束が確信となったのです。マリヤに聖霊が臨み、どんな苦難があっても、信仰によって勝利できることを知りました。その時「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救主なる神をたたえます」と賛美があふれたのです。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。（Ｉテサロニケ５：１６～１７）